

# 新規開講科目「キャリア入門Ⅱ(女性と労働)」の現状と課題

Current status and issues of new courses in “Career Introduction II (Women and Labor)”

北川 節子 (人間科学部こども学科特任教授)

Setsuko KITAGAWA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Specially-appointed Professor)

## 〈要旨〉

本学におけるキャリア教育は平成23(2011)年度から、全学共通の内容・方法により基礎ゼミナール等の科目の一部として開始され、さらに平成28(2016)年度からは独立したキャリア教育科目として設定された。筆者は新規開講科目である「キャリア入門Ⅱ(女性と労働)」の一部を担当している。これは経済学部必修科目であり男性、女性ともに受講することになる。副題「女性と労働」としたこの内容が男性に理解され興味をもたれているのかについて毎回授業アンケートを取り調査を行った。その結果、これは男性、女性とも理解され興味をもつことができる科目であることが分かった。さらに「働く女性の母性保護」「子どもの保護・制度」は女性にとって特に理解・興味のある内容であることが分かった。毎回のリアクションペーパーからは、男性も女性のライフイベントからくる労働問題について知る必要性や、この授業の必要性についての意見が見られた。これらのことから本授業が男性も参加し、さらに1年次に開講する意義があることを認識することが出来た。

## 〈キーワード〉

キャリア教育 男性 女性 授業アンケート

## 1 高等教育におけるキャリア教育

平成23年1月に中央教育審議会が「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」<sup>(1)</sup>を文部科学省に答申した。そこでは、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」、職業教育を「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」としている。

高等教育におけるキャリア教育については次の様に述べられている。「高等教育は…自らの視野を広げ、進路を具体化し、それまでに育成した社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を専門分野の学修を通じて伸長・深化させていく段階」であること、さらに高等教育機関への進学率が約80%にも高まっており、職業を意識せずに進学する学生が多い<sup>(2)</sup>ことから「高等教育が我が国の多くの若者にとって社会に出る直前の教育段階であることを踏まえ、学校から社会・職業への移行を見据えたキャリア教育の充実を目指すことが必要」と、高等教育におけるキャリア教育の重要性が述べられている。

高等教育におけるキャリア教育の取り組みについては、

入学前段階や入学初年次における段階的なキャリア教育の実施、教育課程の中に位置づけられた取り組み、身に付けるべき能力の明確化と到達度の評価、男女共同参画社会の視点を踏まえた教育などが紹介されている。

## 2 本学におけるキャリア教育

### 2-1 キャリア教育の経緯

本学でのキャリア教育は平成23(2011)年度から行われている。各年度の経過は表1の通りである。教育課程での位置づけは、全学共通の1、2年次通年科目である「基礎ゼミナール」の一部とした。内容は、全学生共通の部分と、学部特有の内容で構成した。経済学部では平成25(2013)年度から、職業志向のより強い「ビジネス基礎演習」において実施、翌年からは「ビジネス基礎」「ビジネス応用」で行われた。

実施回数は、1年次、2年次ともに30回の授業のうち、7回をキャリア教育とした。内容は、1年次は「キャリアデザイン」「自己分析」「社会が求める人材像」「業界研究」、2年次は「フェルミ推定」「KJ法」「進路決定のためのPDCA設計」であった。指導する教員は基礎ゼミナール、

ビジネス基礎演習を担当する教員であり相当な数にのぼる。内容や指導方法にばらつきが出るおそれがあったため、共通のスライド資料を作成、説明会を開催し教員への周知を図った。

表1 本学でのキャリア教育取り組みの経緯

年度	経済学部	人間科学部
2011	1年次：基礎ゼミⅠ	1年次：基礎ゼミ
2012	1年次：基礎ゼミⅠ 2年次：基礎ゼミⅡ	1年次：基礎ゼミ 2年次：フィールド基礎演習
2013	1年次：ビジネス基礎演習Ⅰ 2年次：ビジネス基礎演習Ⅱ	
2014	1年次：ビジネス基礎Ⅰ（前期） Ⅱ（後期） 2年次：ビジネス基礎演習Ⅱ	
2015	1年次：ビジネス基礎Ⅰ（前期） Ⅱ（後期） 2年次：ビジネス応用Ⅰ（前期） Ⅱ（後期）	

平成23（2011）年度に行われた1年次のキャリア教育の到達度について、終了時に履修者全員へのアンケートを実施した。到達度は「できた」から「全くできない」までの5段階評価とした。

回収率は62.8%であった。「できた」「まあまあできた」を足し合わせた「できた群」の結果は表2の通りである。「大学生活を大切にしたい」「キャリアデザインの大切さの理解」が高い値を示し、学生生活における意識付けには役立っていることが分かった。その他の項目もおおむね高い値を示し、全学共通の内容を広く浅く教育することも一定の成果があることが分かった。

表2 全学共通キャリア教育の学生評価（2012.2）

項目	できた群
キャリア・キャリアデザインの理解	61.2%
キャリアデザインの大切さの理解	71.5%
社会が求める人材像の理解	67.3%
自分が調べた業界について興味をもつ	70.6%
大学生活を大切にしたい	72.9%
職業選択を意識	66.4%

同時に教員からも意見を聴取した。その結果、基礎ゼミナールの中でのキャリア教育の実施回数にはばらつきがあること、授業における学生の反応は「業界・業種の理解」「社会が求める人材像」では良くないことが分かった。また「自由度が少ない」「学科特有の課題を行う時間がない」「1年次生では業界研究に視点が定まりにくく前向きに取り組めない」などの意見があった。

5年間、基礎ゼミナール、ビジネス基礎演習において、全学共通のキャリア教育を実施してきた。しかし、指導する教員のキャリア教育に対する必要性の認識に差があること、キャリア教育の専門性を有していないこと、キャリア

教育への負担感が大きいなどという問題が生じた。そこで次の段階として、キャリア教育を専門的に実施するための検討に入った。

## 2-2 平成28（2016）年度からのキャリア教育

平成26（2014）年度から進路支援センターを中心にキャリア教育の検討を開始し、平成28（2016）年度から新たな教育を実施することになった。

その考え方は次の通りである。

- ①「キャリア教育科目」として独立させる。
- ②講義科目、演習科目を設定し、キャリア・職業に関する基礎的知識・態度の習得から、応用的能力の育成までを図ることができるように科目を準備する。
- ③開始時期は、経済学部、人間科学部では2016年度から、人文学部は2020年度からとする。必修・選択の別は、各学部・学科が決定する。
- ④キャリア教育は社会的職業的自立に向けて、必要な能力や態度の形成を専門分野の学修を通じて伸長、深化させることである。したがって専門教育を含め、全ての教育がキャリア教育であることを理解しつつ行う。
- ⑤「キャリア教育科目」では、キャリア形成に共通して必要な能力や態度の形成をはかることを目的とする。特に勤労観、職業観等の価値観や、職業に必要な能力を獲得する意識の形成・確立を目的とした教育を意識的に行うことが重要である。また就職を目的とするだけでなく、生涯を通じてキャリア形成を図ることができる基礎を培うようにする。
- ⑥教員はキャリア教育の専門性を有した専任教員とする。必要に応じて、法律・制度、実務関係の教員、企業関係者、職員を配置する。オムニバスで行うこともある。

平成28（2016）年度から実施するキャリア教育科目は表3の通りである。このうち「キャリア入門Ⅰ」は労働の意義、キャリアデザインを、「キャリア入門Ⅱ」は女性の労働問題とハラスメントをテーマとした。この2科目は経済学部については必修科目となった。「キャリアプランニング」は4年次の就職活動に向けて進路を探索し、自分の職業・キャリアプランについて考えることとし、学年に応じた指導を実施することとした。「チームビルディング」「プレゼンテーションスキルズ」は社会的・職業的自立に必要な基礎的能力である人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力、論理的思考力、想像力を養うための科目であり、その実践・応用的科目として「業界課題研究」が設定された。また職業人として活躍している先輩諸氏のキャリアを聞き分析する「キャリアヒストリー」が設定された。

表3 2016年度からのキャリア教育科目

科目名	単位数	配当期
キャリア入門Ⅰ	1	1年1Q2Q
キャリア入門Ⅱ	1	1年3Q4Q
キャリアプランニングⅠ	1	1年2Q
キャリアプランニングⅡ	1	2年2Q
キャリアプランニングⅢ	1	3年3Q4Q
プレゼンテーションスキルズ	2	2年4Q
チームビルディング	2	1年3Q
業界課題研究Ⅰ	1	3年1Q
業界課題研究Ⅱ	1	3年2Q
キャリアヒストリー	2	3年4Q

### 2-3 「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」の設定

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」ではキャリア教育の充実に関する基本的な考え方の1つとして「女性が、長期的な視点に立って人生を展望し、働くことを位置付け、準備できるような教育が必要」<sup>(3)</sup>と述べられている。また高等教育におけるキャリア教育では、「女性のライフイベントを意識したキャリア教育の取り組みも展開」<sup>(4)</sup>されていることが紹介されている。

本学の在籍者における女性の割合は年々増加している。2016年5月1日現在の学校基本情報によると、各学年の女性の割合は、1年次生47.8%、2年次生43.0%、3年次生47.5%、4年次生43.2%と、ほぼ全学生の半数を占めるまでになった。

女性には妊娠・出産というライフイベントがあるため、就業の継続が困難な現状がある。現在では典型的な形ではなくなったが、日本における女性の年齢階級別労働力率のM字型カーブ<sup>(5)</sup>がある。また出産1年前に仕事をしていた女性が、出産を機に54.1%が無職となるという現状<sup>(6)</sup>もある。さらにパートナーである男性の長時間労働の問題<sup>(7)</sup>、そのために男性の家事・育児関連時間が他の先進諸国に比べて最低レベル<sup>(8)</sup>になっているという現状もある。

この現状は、女性が理解しておくべき問題である。また女性だけでなく、社会を共に築いている男性も理解すべきであろう。この女性を取り巻く現状を理解し、男性・女性ともに大学卒業後の生き方を考え、企業選択の重要性を理解し、そのためにも今の学生生活をどのように過ごすかを考える機会を作りたいと考えた。

そこで「キャリア入門Ⅱ」は副題を「女性と労働」にした。なお配当時期は1年次の第3クォーター、第4クォーター、1単位科目であり、授業回数は試験を含め8回である。

### 2-4 第3クォーターでの授業の実際

「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」の各回のテーマは表4の通りである。1回から4回は筆者が担当した。5回目は石川県県民文化局男女共同参画課によるワークショップ「自分の未来図を描いてみよう」を行っていただき、6～7回目は経済学部長の河合正二教授によるハラスメントについての講義をしていただいた。

表4 「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」のテーマ

回	テーマ	担当者
1	若者の働き方と少子化社会	北川
2	働く女性の母性保護	北川
3	子育てをめぐって	北川
4	女性の労働問題	北川
5	「自分の未来図を描いてみよう」	石川県
6	職場のハラスメント	河合
7	パワハラ・アカハラ	河合
8	期末テスト	

この科目は、経済学部は必修科目、その他の学部では選択科目である。授業評価は5回、8回を除く各回の授業終了時に書くリアクションペーパー40%、小レポート10%、期末テスト50%とした。

次に筆者が担当した1回目から4回目の授業概要とリアクションペーパーからみた学生の反応について述べる。

1回目は「若者の働き方」<sup>(9)</sup>として、平成26年度15～29歳の産業別就業者数、校種・男女別の就職率、初職の従業上の地位・雇用形態の構成の推移、新規学卒者の初任給、新規第学卒業者の在職期間別離職率を説明、「日本の少子化社会」として、日本人口の今までと将来と将来、出生数と出生率の推移、人口減少が社会に与えるリスク、少子化社会となった様々な理由について平成27年度少子化社会対策白書を基に説明を行った。

リアクションペーパーには、自分の働き方を考えることができた、就職を身近に感じた、男性の家事・育児の参加の大切さ、性別役割分業の問題、雇用問題や少子化問題に対する理解、人生設計の重要性などの意見があった。しかし少子化問題は高校で既に聞いた、今後の少子高齢社会が不安などの意見もあった。

2回目は「働く女性の母性保護」がテーマである。まず筆者自身の職業生活と家庭生活の経過について紹介をし、与えられた役割をバランスよく果たしていくことの重要性を強調した。この授業は、男性にも生活、労働のパートナーとしての女性の問題について理解してもらいたいと設定したものであり、性ホルモン、月経、妊娠、出産等の生理学的な内容を基に、働く女性の母性保護の観点からの制度について説明をした。

リアクションペーパーからは、女性は将来の自分の姿と

照らし合わせて理解できたという意見や、男性にも知ってもらうことが重要との意見があった。男性は、高校までに女性の課題について知る機会がなかったのか、初めて聞いたとの意見が多かった。女性は大変なことが多いことが分かった、男性も女性を理解すべきなどの女性を思いやる意見が見られた。母性に関する保護制度については男性・女性とも初めて聞いたとの意見が多かった。

3回目は「子育てをめぐる」というテーマで、子どもの権利、子どもの成長・発達の経過を基に、育児休業制度、健診、予防接種や保育制度など、子ども・子育てに関する制度について説明した。さらに現在、問題となっている子どもの貧困問題について現状と原因について説明した。

リアクションペーパーからは、子どもの成長・発達の速さに素直に驚き、子どものための保健活動・経済的支援があることに安心感を持ったという意見があった。子どもの貧困問題は驚きをもって受け止められていたようで、子どもを貧困に陥らせないように、収入が安定的な正規雇用につきたい、そのためには大学生活を大切にしたいとの意見があった。

4回目のテーマは「女性の労働問題」である。理想のライフコースと学校卒業後の働き方について、女性については自身の、男性にはパートナーについて考えてもらった。その後、日本の女性就労の特徴である年齢階級別労働力率のM字カーブとそれが解決にされることによりもたらされる効果、さらに高学歴女性の就労<sup>(9)</sup>について、データを基にしながら説明した。

リアクションペーパーからは、女性が職業を継続することの困難さを理解できたとの意見が多かった。またこの理由がジェンダーに基づく偏見によるものがあること、女性のライフイベントによるものであることが理解できたようであった。女性は、就業先は継続して働けるような企業に就職したい、そのために今からの大学生活も手を抜かずに関心したいとの意見があった。男性側からは、女性の課題について理解でき、働きやすい職場づくり、家庭づくりをしたいとの意見があった。

### 3 「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」授業評価

本授業は副題が示すように“女性”がテーマとなる。経済学部では必修科目であり、男性、女性ともに同じ内容を学ぶことになる。そのため、この授業が男性に理解され、興味をもって受講してもらえるのが課題ではないかと思われる。そこで各回について授業アンケートを取り授業の評価を行った。

#### 3-1 方法

時期：平成28（2016）年9月26日～11月14日

対象：「キャリア入門Ⅱ」第3クォーター受講生全員

方法：1回から7回の授業後に授業アンケートを実施。調査内容は「授業が理解できたか」「授業内容に興味を持てたか」について4段階の評価、および「学科」「性別」とした。

倫理的配慮：1回目の授業開始時に、アンケートへの協力を求めた。また、参加は自由であること、不参加でも評価に影響しないこと、結果は論文としてまとめること、アンケートの結果は期末試験終了後に公表することを説明した。

なおアンケートの回収（投函）をもって協力と判断した。

#### 3-2 結果

##### 1) 学生の出席及び回収状況

受講生は経済学部1年次生254名とスポーツ学科1年次生2名の256名、性別の内訳は男性115名、女性141名であり、若干女性が多い集団であった。授業への出席率は90%前半であった。

アンケートの回答率は85%前後であり、多くの学生から調査への協力を得ることが出来た。

表5 キャリア入門Ⅱの出席状況及びアンケート回収状況（履修者数256名）

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目
出席者数	245	231	225	232	236	241	237
出席率	95.7%	90.2%	87.9%	90.6%	92.2%	94.1%	92.6%
回答者数	230	206	202	201	203	206	200
無効回答	8	8	3	5	2	3	2
有効回答	222	198	199	196	201	203	198
回答率	90.6%	85.7%	88.4%	84.5%	85.2%	84.2%	83.5%

##### 2) 授業内容の理解

授業内容の理解については、表6の通り、すべての回において「できた」「まあまあできた」が90%を超え、内容については理解しやすいものであったことが分かった。

「できた」に限ってみると、6回目、7回目のハラスメント、5回目の「自分の未来図を描く（県）」が高い値を示した。

表6 授業内容の理解

授業テーマ	できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
①若者の働き方 少子化社会	51.4%	47.3%	0.9%	0.5%
②働く女性の母性保護	49.5%	47.0%	3.0%	0.5%
③子どもの保護・制度	41.2%	56.8%	2.0%	0
④女性の労働問題	40.3%	54.6%	5.1%	0
⑤自分の未来図を描く（県）	54.7%	41.8%	2.5%	1.0%
⑥ハラスメント	59.6%	39.4%	1.0%	0
⑦パワハラ・アカハラ	54.5%	44.9%	0.7%	0

授業内容の理解について男性、女性を比較すると表7の通りとなった。「できた」に着目してみると、2回目「働く女性の母性保護」、3回目の「子どもの保護・制度」、6回目の「ハラスメント」が女性の方が高い値となり、女性がより理解をしていること示された。

1回目「若者の働き方、少子化社会」、4回目「女性の労働問題」、5回目「自分の未来図を描く」、7回目「パワハラ、アカハラ」は男女で理解の差が少なかった。

表7 授業内容の理解の男女比較

授業テーマ/回答男女数	できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった	
①若者の働き方・少子化社会	男性 99	50.5%	46.4%	2.0%	1.0%
	女性123	52.0%	48.0%	0	0
②働く女性の母性保護	男性 88	35.2%	59.1%	4.5%	1.1%
	女性110	60.9%	37.2%	1.8%	0
③子どもの保護・制度	男性 88	31.8%	63.6%	4.5%	0
	女性111	48.6%	51.4%	0	0
④女性の労働問題	男性 87	39.1%	52.9%	8.0%	0
	女性109	41.3%	56.0%	2.7%	0
⑤自分の未来図を描く(県)	男性 86	52.3%	41.9%	4.7%	1.2%
	女性115	56.5%	41.7%	0.9%	0.9%
⑥ハラスメント	男性 92	53.3%	44.6%	2.2%	0
	女性111	64.9%	35.1%	0	0
⑦パワハラ・アカハラ	男性 86	52.3%	46.5%	1.2%	0
	女性112	56.2%	43.8%	0	0

3) 授業内容への興味

授業内容への興味については、表8の通り、すべての回において「できた」「まあまあできた」が90%を超え、全ての回について興味があったことが分かった。

「できた」に限ってみると、5回目の「自分の未来図を描く」が高い値を示し、1回目の「若者の働き方・少子化社会」、4回目の「女性の労働問題が」低い値となった。

表8 授業内容の興味

授業テーマ	もてた	まあまあもてた	あまりもてなかった	もてなかった
①若者の働き方 少子化社会	32.4%	59.9%	6.3%	1.4%
②働く女性の母性保護	39.4%	51.0%	7.6%	2.0%
③子どもの保護・制度	40.7%	53.8%	5.0%	0.5%
④女性の労働問題	37.2%	55.1%	7.1%	0.5%
⑤自分の未来図を描く(県)	50.7%	43.3%	4.5%	1.5%
⑥ハラスメント	42.4%	54.2%	2.5%	1.0%
⑦パワハラ・アカハラ	43.9%	52.0%	3.0%	1.0%

授業への興味について男性、女性を比較すると表9の通りとなった。「もてた」についてみると、5回目以外は女性が低い値となった。特に女性が高くなった回は1回目「若者の働き方・少子化社会」、2回目「働く女性の母性保護」、3回目「子どもの保護・制度」であった。

表9 授業内容の興味の男女比較

授業テーマ/回答男女数	もてた	まあまあもてた	あまりもてなかった	もてなかった	
①若者の働き方・少子化社会	男性99	24.2%	61.6%	11.1%	3.0%
	女性123	39.0%	58.5%	2.4%	0
②働く女性の母性保護	男性88	28.4%	54.5%	13.6%	3.4%
	女性110	48.2%	48.2%	2.7%	0.9%
③子どもの保護・制度	男性88	29.5%	59.1%	10.2%	1.1%
	女性111	49.5%	49.5%	0.9%	0
④女性の労働問題	男性87	33.3%	56.3%	9.2%	1.1%
	女性109	40.4%	54.1%	5.5%	0
⑤自分の未来図を描く(県)	男性86	51.2%	40.7%	5.8%	2.3%
	女性115	50.4%	45.2%	3.5%	0.9%
⑥ハラスメント	男性92	38.0%	56.5%	3.3%	2.2%
	女性111	45.9%	52.3%	1.8%	0
⑦パワハラ・アカハラ	男性86	43.0%	51.2%	4.7%	1.2%
	女性112	44.6%	52.7%	1.8%	0.9%

4 「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」の意義

「キャリア入門Ⅱ」は副題が「女性と労働」である。最初はこの女性に特化した授業を男性が受け入れてくれるのが心配であった。授業アンケートの結果からは、男性も理解・興味に高い値を示しており、この授業は男性にも受け入れられる内容であることが分かった。

ただ理解・興味共に女性の方が全体として高い値を示しており、より女性の方が受け入れてくれる授業であったことが分かる。女性が特に高い値を示したものは、理解については「働く女性の母性保護」「子どもの保護・制度」「ハラスメント」、興味については「若者の働き方・少子化社会」「働く女性の母性保護」「子どもの保護・制度」であった。「働く女性の母性保護」「子どもの保護・制度」は女性にとって興味深い内容であることが考えられる。しかし男性側には理解が難しい、興味のあまり持てない内容であったことが推測される。おそらく自分の問題として実感を持って考えられないからではないかと思われる。

毎回、リアクションペーパーを書かせたため、今回の授業アンケートでは目立った自由記述がなかった。毎回のリアクションペーパーの感想をみると、男性の意見として女性への理解や男性としての女性に対する向き合い方に関する前向きな意見が多くあった。さらに男性側の労働問題についても扱ってほしいとの意見もあった。

また男性・女性ともに、女性の働き方に関する知識や理解が深まり、2年、3年後の就職活動とともに、大学生活の重要性に気付けたとの意見がみられた。社会情勢に関心を持つことや選挙への関心も高まったとの意見もあったハラスメントの授業からはハラスメントの概念の幅広さ、被害者にも加害者にもなりうる危うさに気付けたようであった。アカデミックハラスメントからは大学生活を送る際の

注意が具体的にわかったとの意見もあった。

今回、はじめて「キャリア入門Ⅱ（女性と労働）」を担当したが、この授業は1年次に行くことに意味があるように思えた。具体的な就職活動は2、3年先だが、女性のライフイベントの特徴から女性が就業を継続すること、社会で働くときの様々な課題について具体的に提示することは、就職活動とそれ以前の今の大学生活をどのように送るかの決断を促すことにつながる。また女性の就業やジェンダーの課題を知ることは、男性側にとっても将来のパートナーを含めての人生設計を考えること、社会に出てからのジェンダーの向き合い方について考えることが出来る時間となる。

本田<sup>(1)</sup>はキャリア教育には「適応」と「抵抗」の両方が

必要と述べている。本学のキャリア教育科目は、本田が言う「適応」を促進させる科目が多い。また専門教育もそのほとんどは業界に「適応」できるような専門的な知識・技術を付与する科目となる。「抵抗」とは環境を自分が正しいと思う方向に替えていくことであるが、その前提となる社会の仕組みや課題について、学生に正確に伝えることが必要となる。

筆者はキャリア教育の専門家ではないため、学生に対して自らの環境を正しいと思う方向に変えていくことについてまで学生に考えさせることはできない。ただ女性をめぐる様々な課題について、男性、女性とも同じ材料でともに考えることは、今後も必要であると思い、この科目の重要性を再認識している。

## 注

- (1) 文部科学時報1平成23年3月臨時増刊号第1623号「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中央教育審議会答申
- (2) 前掲書(1)p142 大学生1年生の調査では約31%が高校卒業以前に職業を意識したことがないと回答している。
- (3) 前掲書(1)p30
- (4) 前掲書(1)p70
- (5) 「平成28年度男女共同参画社会白書」I-2-3図 主要国における女性の年齢階級別労働力率  
[http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h28/zentai/html/honpen/b1\\_s00\\_01.html](http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h28/zentai/html/honpen/b1_s00_01.html) 参照日：平成28年8月10日
- (6) 「平成27年版少子化社会対策白書」内閣府 p18
- (7) 前掲書(5)p20
- (8) 前掲書(5)p22
- (9) この授業は「平成27年版 子ども・若者白書」「平成28年版 男女共同参画白書」厚生労働省「新規学校卒業者の就職離職状況調査」からスライド資料を作成した。
- (10) 日本女子大学 現代女性キャリア研究所「女性のキャリア

支援と大学の役割についての総合的研究『女性とキャリアに関する調査』結果報告」<http://riwac.jp/publication/report/> 参照日：平成28年7月28日

- (11) 本田由紀「教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ」ちくま新書 筑摩書房 2009年p183

## 参考文献

- 長田尚子・藪田由気己子「女性のライフプランニングを志向した授業実践—共通教育科目『女性とキャリア』の開発と評価—」現代女性とキャリア(6)89-101 2014.6
- 山口理恵子「キャリア教育に関する私論—『女性キャリア』との関連から—」城西大学経営紀要第7号137-148 2011.3
- 大沢真知子・馬欣欣「高学歴女性の学卒時のキャリア意識と転職行動—『逆選択』はおきているのか—」現代女性キャリア研究所紀要(7)87-107 2015.07
- 野村康則「女性のキャリアデザインと就業状況」安田女子大学紀要43 93-103 2015